

《書 評》

Penelope J. Goodman (ed.),
Afterlives of Augustus, AD 14-2014

Cambridge: Cambridge University Press, 2018, Pp. xiv+418.

岡 本 幹 生

本書は、2014年8月19日にリーズ大学でアウグストゥスの没後2000年を記念して開催された‘Commemorating Augustus’と題する研究集会を契機として刊行されたものである。この研究集会はアウグストゥスが死後どのように受容されていったのかということを中心に大きなテーマとして掲げ、開催された¹⁾。アウグストゥスは前63年9月23日に生まれ（Suet. Aug. 5）、後14年8月19日に死去した（Suet. Aug. 100）とされ、その治世はおおよそ40年に亘る。しかし、アウグストゥスが多大な影響力を及ぼしたのは彼の治世に限ったことではない。むしろ、アウグストゥスが世を去ったことにより、彼自身から発信されるイメージがなくなり、他者が彼のイメージを借用・批判・理想化・修正・再構築しやすくなったといえるだろう。没後、アウグストゥスは、あるときには理想的な君主像を提供し、あるときには芸術のパトロンとして表象され、またあるときには暴君の象徴とされた。そこで、この2000年間において各々の時代や地域でアウグストゥスが受容されていった様子について広く概観していこうとしたのが本書である。そのため、各章を担当した執筆者たちがそれぞれの観点からアウグストゥスの受容について述べるという形をとっている。その中で、編者であるペネロペ・グッドマンは、各々の時代や地域によって作り出されたアウグストゥス・イメージの特徴についての理解を深め、アウグストゥスへの学術的アプローチと受容史の関係をより深く理解することを本書の目標として掲げている（p.2）。

本書の刊行以前ではアウグストゥスの受容に着目して広く通史的に概観する試みはあまり見られない²⁾が、同様の試みは既にユリウス・カエサル³⁾やネロ⁴⁾、エラガバルス⁵⁾を対象として行われてきた。本書はローマの皇帝や将軍といった特定の人物に焦点を当て、後代においてどのようにその人物が受容されたのかを概観する、すなわち特定の人物についての受容史を見ていくという研究の流れを汲むものといえる。

このような受容研究の意義についてトム・スティーブンソンは、本書に対する書評の中で、受容研究は古典学や古代史の現代における重要性を議論する中で有意義なものであると指摘している。その上で、本書がこの受容研究の意義を確立することと受容研究の将来的な可能性を指摘することを意図しているものと評した⁶⁾。

以上のことを踏まえた上で、以下では本書の意義と編者の目標が本書によって達成されたのかについて検討していきたい。まず、本書の内容や構成について紹介する。

本書の目次は以下の通りとなっている。

1. Best of Emperors or Subtle Tyrant? Augustus the Ambivalent
2. The Last Days of Augustus
3. Seneca's Augustus: (Re) calibrating the Imperial Model for a Young Prince
4. Embodying the Augustan in Suetonius and Beyond
5. The First Emperor? Augustus and Julius Caesar as Rival Founders of the Principate
6. Julian Augustus on Augustus: Octavian in the *Caesars*
7. Augustus, the Harbinger of Peace: Orosius' Reception of Augustus in *Historiae Adversus Paganos*
8. The Byzantine Augustus: The Reception of the First Roman Emperor in the Byzantine Tradition
9. Augustus and the Carolingians
10. Augustus as Visionary: The Legend of the Augustan Altar in S. Maria in Aracoeli, Rome
11. From Peacemaker to Tyrant: The Changing Image of Augustus in Italian Renaissance Political Thought
12. Augustus in Morisot's 'Book 8' of the *Fasti*
13. The Proconsul and the Emperor: John Buchan's *Augustus*
14. In Search of a New *Princeps*: Günther Birkenfeld and His *Augustus* Novels, 1934-1984
15. Augustus in the Rhetorical Tradition
16. The Parthian Arch of Augustus and Its Legacy: Memory Manipulation in Imperial Rome and Modern Scholarship
17. Augustus and the Politics of the Past in Television Documentaries Today
18. *Augusto* Reframed: Exhibiting Augustus in Bimillennial Rome
19. Augustus' (Non) reception in America and Its Context

目次では提示されていないが、本書はイントロダクションにあたる第1章と、4つのパートに分けられる諸論文とで構成されている。

まず、イントロダクションにあたる第1章「至上の皇帝もしくは陰險な暴君？アンビバレントな人物アウグストゥス」では、編者グッドマンが本書のテーマや目標について示すとともに、古代から現代に至るまでのアウグストゥス・イメージの変遷を概説している。

次に、第1パートは古代におけるアウグストゥスの受容について論じるもので、第2章から第6章がこれに相当する。第2章「アウグストゥスの最期の日々」では、スエトニウスを

はじめとする史料を用いて、アウグストゥスの「良き死」が演出され、個人が神的な榮譽に与ることに対する抵抗感を軽減していることを述べている。第3章「セネカのアウグストゥス—若き君主のために皇帝のモデルを（再）定義する—」では、若き日のネロに、彼の家庭教師であったセネカが皇帝の「手本」として示した、2つの対照的なアウグストゥス・イメージについて考察している。『カボチャに変身すること (*Apocolocyntosis*)』ではアウグストゥスを天における節制の擁護者として描写し、ポジティブな評価が窺えるのに対し、『寛容について (*De Clementia*)』では若かりし頃の粗暴なアウグストゥスの描写が見られる。後者は、若い頃の無分別な行いだけで皇帝の良し悪しを判断すべきではないということを示しており、義弟ブリタニクスを毒殺したという嫌疑がかけられていたネロを擁護することが意図されている。また、これら2作品から窺えるように、セネカはアクティウムの海戦前後においてアウグストゥスの人格が非難すべき対象から慈悲深い皇帝へと変化したことを示した。それは、今日、アウグストゥス・イメージを捉えていく上でも重要だと本章では主張されている。第4章「スエトニウスの中で、そして他の著者の作品の中でアウグストゥス的なものを具現化する」ではアウグストゥスや彼の後継者であるユリウス・クラウディウス朝の皇帝たちの身体についての描写を検討している。特にスエトニウスの『ローマ皇帝伝』のような皇帝たちの伝記集における身体の描写では、アウグストゥスの身体的特徴が1つのモデルとなっていることを指摘する。アウグストゥスの身体的特徴を後の皇帝たちが共有することで、アウグストゥスの神性やカリスマ性、権威を継承していることを主張する働きがあることに言及している。

第5章「初代皇帝はどちらか？元首政確立者の座を競うアウグストゥスとユリウス・カエサル」では政治支配層の人々は、誰が現在の政治システムの創設者すなわち初代ローマ皇帝だと認識していたのかについて議論している。本章を担当したジョセフ・ガイガーは、帝政初期においてはアウグストゥスが現体制を確立したと概ね考えられていたが、軍事力に重きを置くトラヤヌスがカエサルを自身のモデルにすることを好んだこともあり、最初のローマ統治者と捉える風潮が生まれたことを指摘している。第6章「ユリアヌス・アウグストゥスのアウグストゥスについて—『諸皇帝論』におけるオクタウィアヌス—」では、かの背教者ユリアヌスの著とされる『諸皇帝論 (*Caesares*)』の中で提示されたアウグストゥスのイメージとユリアヌス自身の理想や志の間にある関連性について論じている。『諸皇帝論』では、現実政治における曖昧さをもったオクタウィアヌスは、太陽神アポロと哲学のおかげで改善されたと述べられており、『諸皇帝論』の随所でオクタウィアヌスに言及している。本章を執筆したショーン・タファーは、『諸皇帝論』の随所で見られるアウグストゥスへの言及がこの著作の特異性であるとし、ユリアヌスがアウグストゥスの中に自身の理想や志を見出した証拠だとしている。そして、アウグストゥスの中に見出した理想や志はオクタウィアヌスが共和政から元首政へと政治変革を行ったことや太陽神アポロとのつながりがあり、ユリアヌス自身がキリスト教から古来の信仰への「宗教改革」を企図していたことと

太陽神ヘリオスに愛着を持っていたこととリンクすることを示している。

続いて第2パートでは初期キリスト教と中世に関連するアウグストゥスの受容について扱われており、第7章から第10章が該当する。第7章「平和の先駆者アウグストゥス—『異教徒を反駁する歴史 (*Historiae Adversus Paganos*)』におけるオロシウスのアウグストゥスの受容—」では、アウグストゥスが内乱を収束させ、平和を確固たるものにしたこととキリストの誕生の共時性 (シンクロニシティ) を司祭オロシウスが強調したことが、いかにアウグストゥスとキリスト教との結びつきを強めたかについて論じている。さらに、中世を通じてヨーロッパ各地で写本が行われた『異教徒に反駁する歴史』において、オロシウスがいわゆる帝政確立をキリスト降誕の予表と捉えたことは、中世以降のキリスト教下でのアウグストゥス・イメージに影響を与えた可能性を示唆している。第8章「ビザンツのアウグストゥス—ビザンツの伝承の中での初代ローマ皇帝の受容—」では、4世紀前半のキリスト教帝国の形成段階、6世紀のビザンツ最盛期 (ユスティニアヌス帝期)、9世紀の帝国リヴァイバルの3つの時期に分け、キリストの誕生とアウグストゥスの単独支配の関連性、さらには教会と帝国の共存についてのビザンツ皇帝の認識を紹介している。第9章「アウグストゥスとカロリング朝の人々」ではカール大帝亡き後、アウグストゥスが理想像やモデルではなく、称号となっていった様子を描いている。第10章「予見者としてのアウグストゥス—ローマ市アラコエリの聖母マリア教会におけるアウグストゥスの祭壇伝説—」ではアウグストゥスがキリストの権威、延いてはキリスト教教会の権威の下に政治権力を置くことの正当性を主張する道具になったことについて示している。

そして、第11章と第12章から成る第3パートではルネサンス期や啓蒙主義下におけるアウグストゥスの受容について論じられている。第11章「調停者から暴君へ—イタリア・ルネサンスの政治思想におけるアウグストゥス・イメージの変化—」では、イタリアで共和政体制をとる都市国家が確立していったことにより、帝国支配や君主政への反感が醸成され、帝国支配の権化とされたアウグストゥスを断罪する著作が目立つようになったことを紹介している。第12章「モリゾの『祭暦 (*Fasti*)』第8巻におけるアウグストゥス」では、オウィディウスの『祭暦』の欠巻をクロード・モリゾが補うという体裁で書かれた本著作を紹介し、その中に組み込まれている、アウグストゥスを介して行われた17世紀フランス君主政の正統性の主張やプロパガンダを検証している。モリゾがフランスの都市ディジョンの祝祭やカーニバル、入市式でのパレードを主要な活動とする「メール・フォユ (*La mère folle*)」という組織のメンバーとされていること、国王の入市式がローマの凱旋式をモデルにしていたことを踏まえて、本章の論者はモリゾのテキストの中のこのような政治的メッセージを検討することに意義を見出している。

最後に、第4パートは現代におけるアウグストゥスの受容について取り上げたもので、第13章から第19章がこれに当たる。第13章「総督と皇帝—ジョン・バカンの『アウグストゥス』—」では、政治家であり小説家であったバカンが書いたアウグストゥスの伝記に注目

し、バカンが古代のローマ帝国というプリズムを通して現代の大英帝国を見ていたこと、逆に大英帝国の中にローマ帝国を見出そうとしていたことを示している。第14章「新たなプリンケプスの探求について—ギンター・ビルケンフェルトと1934-1984年の彼のアウグストゥスについての小説—」では、ビルケンフェルトのアウグストゥスについての小説3作品を考察することで、当時の古典の受容の中でのアウグストゥスの役割や歴史的思想の変遷について明らかにした。第1作はヒトラーとナチスが権力を掌握した後である1934年、第2作はソヴィエトの赤軍によりスターリングラードが陥落し、ドイツ軍が退却を余儀なくされたのとほぼ同時期である1943年、第3作は冷戦による緊張が高まりを見せ、ベルリンの壁が建てられたすぐ後の1962年に書かれていることから窺えるように、ドイツの歴史の転換点でアウグストゥスの小説がリメイクされており、当時の思想の影響が見て取れる。第15章「修辞学の伝統の中でのアウグストゥス」では、修辞学研究者の中で一定の支持を受けている、アウグストゥスの登場により修辞学が衰退したという言説を見直している。この言説が生じた原因を、戦間期に修辞学と民主主義との結びつきが強くなったことに求め、共和政の終焉を修辞学の衰退と見做すようになったと説明している。また、アウグストゥス帝期の史料としてハリカルナッソスのディオニュシオスの『古代弁論家 (περὶ τῶν ἀρχαίων ῥητόρων)』を挙げて、その当時の人が元首政期を修辞学の実践において大きな復興の時代であったと捉える見方を紹介している。

第16章「アウグストゥスの対パルティア凱旋門とその遺産—帝政ローマと現代の学問における記憶の操作—」では、凱旋門という視覚的なモニュメントがいかに人々の記憶を左右するかを論じている。本章で特に注目しているのは都市ローマにかつて存在したアウグストゥスの対パルティア凱旋門である。この凱旋門は、アウグストゥスの外交努力によって、パルティアから軍団旗を奪還したことを記念して捧げられたものである。実際には、この奪還に際してアウグストゥスはパルティアに対して軍事的勝利は疎か軍事的衝突すらしていない。このようなアウグストゥスの対パルティア凱旋門を先例としてネロやティトゥス、セプティミウス・セウェルス、コンスタンティヌス大帝の凱旋門が都市ローマに建設された。そして、それらは軍事的勝利に見せかけることや実際以上に功績を誇張することに一役買っており、後の時代の歴史記述に影響を与えるだけでなく、現代の学者にも先入観を与えてしまうほどの影響力があるとしている。

第17章「今日のテレビのドキュメンタリーにおけるアウグストゥスと過去の政治学」ではイギリスのBBC、アメリカのPBS、ドイツのZDFで放送された3つのアウグストゥスに関するドキュメンタリーを分析している。これらのドキュメンタリーにおけるアウグストゥスの描写や解釈には勿論、専門家の意見を反映させて構成している部分もあるが、そこには番組制作者の意図が見られ、現代に生きる我々がそのとき持っている関心を反映していることを示している。第18章「再構成されたアウグストゥス—2000年記念のローマでアウグストゥスについての展示をする—」では、イタリア、特にローマ市でのアウグストゥスの没後

2000年を記念して行われた展示企画を紹介している。イタリアでは、この展示企画についてネガティブな意見が散見される。それは、この展示会がムッソリーニの計画していたアウグストゥス生誕2000年を記念した展示会（1937年）を連想させ、ファシズムに対するイタリア人の自己規制が働くためとしている。また、このような企画をする際、行政担当者と建築家の間の衝突や予算の問題など行政面でのトラブルが企画の障害になっていることに苦言を呈している。第19章「アメリカにおけるアウグストゥスの（非）受容とそのコンテクスト」ではアメリカにおけるアウグストゥスに対する関心の低さや非受容について考察している。共和政を重視するアメリカにおいては、その破壊者と見做されるアウグストゥスやカエサルは受容されがたい。その上、共和政の破壊者としてよく言及されるのは、アメリカにおいて認知度の低いアウグストゥスではなくむしろカエサルであることが、アメリカにおけるアウグストゥスの受容を妨げている。また、第二次世界大戦中においてはアウグストゥスに共感的な意見をもつことでファシスト同調者と思われられる風潮があったことも、アウグストゥスへの関心の低さや非受容に影響を与えていることを指摘している。

以上が本書の内容の紹介である。パート毎に見ていくと、イントロダクションに1章、古代に5章、中世に4章、近世・近代に2章、現代に7章という割り当てになっている。近世・近代についての扱いが多少手薄にはなっているが、概ね没後2000年をカバーしているといっていよう。

先にも述べたように、本書は特定のローマ人についての受容史を概観しようとする研究動向に則ったものである。そのため、本書の意義を検討する前に、まず評者なりに受容史を見ていくことの意義を提示する。評者はこのように受容史を概観することの意義を大きく3つ考えている。まず1つ目は、受容史を整理することが、研究史の整理や先行研究の意義づけに繋がることである。以下、本書の中から例を挙げてみる。まず第1章では、ロナルド・サイムの『ローマ革命』（初版は1939年刊行）には著者自身のファシズム経験が反映されているとしている。それは、サイムが罪を犯して台頭をした、血の犠牲の上に立った独裁者としてアウグストゥスを描き、元首政への不信感を呈している点である（p.19）。さらに、第18章での、イタリア人がアウグストゥスに関する展示の中にファシズムの姿を見出してしまうという言及も踏まえると、アウグストゥスについての研究は意図せずともファシズムの影響を受けてしまうことが窺える。このファシズムの影響は過去のものとも言い切れない。第19章で既に紹介した通り、アメリカでのアウグストゥスへの非受容または関心の低さの一方に、アウグストゥスへの共感がファシズムへの同調と思われられることが挙げられている。この章では、アメリカでこのような風潮が生じた原因をサイムに帰している（pp.356-357）。そうすると、アウグストゥス研究におけるファシズムの影響は比較的新しい研究にも多かれ少なかれ見られるかもしれない。勿論、このように同時代以降の研究にも大きな影響を与える因子となったのはファシズムに限られないし、このような影響を被ったあるいは被っている

のも当然アウグストゥス研究に限られたものではないだろう⁷⁾。ある人物またはある出来事がどのように受容されていたのかを検討することは、どのようなフィルターをもってその人物またはその出来事が見られていたのかを測る試金石になる。このような受容史はその研究が発表された時期の思想や社会の影響について見つけ直すきっかけを与えるだけでなく、研究史を整理する上でも資するところがあるだろう。

次に2つ目として、受容史は史料を扱う際のメルクマールになることが挙げられる。第2章や第4章ではアウグストゥスの描かれ方に注目し、第5章ではローマに生きる人々のアウグストゥスやカエサルに対する認識に注目して論を進めている。史料における描かれ方やその時代の人々の認識に注目することは、その史料がどのような認識や意図の下で書かれたものなのかを知ることに繋がる。史料には、その著者によるバイアスが多かれ少なかれかかっている。史料の著者の認識や意図を探ることで、史料から極力バイアスを取り除き、そこから必要な情報を得る足掛かりになる。

最後に3つ目として、受容史を見ることで、古代になされた表象というものが古代においてだけでなく現代に至るまでいかに影響を与えているかを把握することができる。評者の考える意義の1つ目と2つ目はそれぞれ現代においての受容、古代においての受容が主であり、通史的に概観する意義とは言い難いところがあったが、この3つ目の意義については、本書のように幅広い時代や地域を扱い受容史を提示することからこそ見て取れるものである。ローマ史ではポール・ツァンカーが視覚的なモニュメントやそこから発生するイメージの歴史的な重要性を説いた⁸⁾ ことを1つの契機として、表象やイメージというテーマが注目されるに至った。受容史は時代的にも地域的にもローマという枠組みを超えたものとなっており、表象やイメージというテーマの研究の可能性を広げていくことが期待される。

このような受容史の意義の中で、本書がアウグストゥスについて扱ったことはこれまでよりも大きなパースペクティブをもたらしたように思われる。アウグストゥスは良くも悪くも君主の代表格とされてきた人物であり、その分、多岐に亘ってそのイメージが用いられてきた。その多様なアウグストゥス・イメージを本書は扱っているため、本書が議論やテーマの一貫性を欠いているという謗りを受けるかもしれない。しかし、本書はあくまで概説的にアウグストゥスの受容について取り扱ったに過ぎない。スティーブンソンが書評で述べている通り、本書を‘Companion’の類と見ても差し支えないだろう⁹⁾。本書はローマの表象やイメージの問題についての研究をする際の1つの足掛かりといえよう。

最後に、編者グッドマンが掲げた本書を通底する目標は十分に成し遂げられたのかについて確認する。まず1つ目は、各々の時代や地域によって作り出されたアウグストゥス・イメージの特徴についての理解を深めるという目標であった。これは概ね達成されたといえるだろう。数々の具体的な事例とその背景について述べられた各執筆者の論考がそれを物語っている。次に2つ目は、アウグストゥスへの学術的アプローチと受容史の関係をより深く理解するという目標であったが、評者は目標達成には不十分ではないかと考えている。確かに

テレビのドキュメンタリーや小説、展覧会にまで視野を広げ、アウグストゥスの受容についてのさまざまな角度から焦点を当てた点には見るべきところがある。しかし、それらはアプローチの方法の枠を広げたに過ぎず、これらを他の事例と合わせて一様に扱っていいのかについては疑問である。古代から近世・近代のパートまでは、アウグストゥスを通して権力や権威をどのように主張あるいは否定してきたかについて見ているが、現代のパートの第14、17、18章は人口に膾炙したアウグストゥス・イメージを模索することを目的としている。そのため、これら3つの章が他の章と比べたときに異質に感じられ、その他の章でつくられた受容史の流れから脱線したように思えてしまう。近年注目されているパブリックヒストリーの流れを受けて、これらの章を導入したと思われるが、却ってこれらの章による脱線が2つ目の目標の達成を阻んでいるような気がしてならない。そして、もし上述したように本書に一貫性のなさを感じるのならこの脱線が一因となっているかもしれない。本書がさまざまな執筆者の協力の下で制作されているため、このような事態が生じ得ることは理解できるが、これらの章を別枠として紹介するなどの編集上の工夫があると、本書についてまた違った評価ができたかもしれない。

注

- 1) 'Commemorating Augustus' という研究集会については以下を参照。https://augustus2014.com/ (2019年9月2日閲覧)。
- 2) ローマのイメージを受容する様子を通史的に概観する中で、頻繁にアウグストゥスについて言及しているものはある。たとえば、Tanner, Marie, *The Last Descendant of Aeneas: The Hapsburg and the Mythic Image of the Emperor*, New Haven: Yale University Press, 1993.
- 3) Wyke, Maria (ed.), *Julius Caesar in Western Culture*, Malden, Mass.: Blackwell, 2006; Wyke, Maria (ed.), *Caesar: A Life in Western Culture*, Chicago: University of Chicago Press, 2008.
- 4) Elsner, Jas and Master, Jamie (eds.), *Reflection of Nero: Culture, History and Representation*, London: Duckworth, 1994.
- 5) Icks, Martijn, *The Crimes of Elagabalus: The Life and Legacy of Rome's Decadent Boy Emperor*, London: I.B. Tauris, 2011.
- 6) Stevenson, Tom, "Review of: P.J. Goodman (ed.), *Afterlives of Augustus, AD 14-2014*", *Classical Review* 69-1 (2018), 236.
- 7) その他の顕著な例としては、ローマ史研究において、ローマ化という概念が帝国主義や植民地主義の影響を受けて形成されたことが挙げられる。Hingley, Richard, "The 'legacy' of Rome: the rise, decline, and fall of the theory of Romanization" in Webster, J. and Cooper, N. (eds.), *Roman imperialism: post-colonial perspectives*, Leicester: School of Archaeological Studies; University of Leicester, 1996, 35-48.
- 8) Zanker, Paul (translated by Alan Shapiro), *The Power of Images in the Age of Augustus*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 1988.
- 9) Stevenson (2018), 233.